説している．スミレの解説書としては最も新しく，またよく纏められていて，利用しやすい本である． (山崎 敬)

□日本植物画倶楽部（著），大場秀章（監），大槻葉子（英訳）：**日本の絶滅危惧植物図譜** 384 pp. 2004. ¥9,800. A 4 版．アボック社．ISBN: 4900358576.

絶滅危惧植物182図が収められており，簡単な記述とその英訳文を伴う．植物名の由来を記したものが多い．同倶楽部創立10周年記念行事として，75人の会員の分担になるものなので，画の出来ばえにはいま一息というものも混ざっている．絵画なので，ある程度表現を工夫して特徴を見せる工夫が欲しかったと思うものもある．部分図を伴わない図もいくらかあるが，貴重な栽植品を解剖することに遠慮もあったことと思う．写真は「ありのまま」を記録すると言われるが，人間がそれが「ありのまま」であることを認識しなければ知識にはならないので，人がそれを認識した上で描いてくれる植物画というものには，一層の価値が出るだろう．この本にはないと思うが，数ある植物画展入選作品の中には，制作者が「ありのまま」に描いたつもりなのに，重大な特徴を見落としていて，審査者も出来ばえの良さに気を取られて気づかないという例がある．将来は貴重種ばかりでなく，そこらの普通な植物も対象にしてもらいたい．貴重種ばかりに価値があるのではないからである．

部分図には説明がほしい，さもないとどの部分を描いたのか，迷うことがある．倍率がすべて付けてあるのは行き届いているが，これはスケールバーの方がよい．この頃はコピーばやりだから，画を原寸で利用するとは限らない，私も整理には他の資料とサイズを合わせるため，縮小コピーを用いることがある．この画を画像データベースに組み込むことを想定すれば，その得失はすぐにわかるとだろう．366–378頁に原画制作者・所感・制作メモという見出しがあり，制作者による感想や取材源が記されている．こういう性格の植物では，取材源の表示は微妙な問題を含むことは十分理解できるが，少なくとも栽植品については，ある程度遡及できるような情報が必要ではないだろうか? そうでないと同定に疑問が出たとき，折角の作品を再検討しようがなく，反故になってしまうおそれがある．たとえばオニカンアオイの図を矢原（監）レッドデータプランツ（山と渓谷社）の写真や平凡社: 日本の野生植物の記事とくらべると，花がどうも違うような感じなので確かめたいとする．山渓本のは現場写真だし平凡社のは記述だけだから再検はむつかしい．しかし本書では元の材料をたどることは多くの場合可能のはずだから，再確認の手段はあるだろう．

(金井弘夫)

□Döbbeler P. and Rambold G. (eds.): **Contributions to Lichenology, Festschrift in Honor of Hannes Hertel. Bibliotheca Lichenologica Band 88** 739 pp. J. Cramer, Berlin. 2004. 148 EUR.

先頃ミュンヘンの国立自然史博物館の植物研究部長を退官された Hannes Hertel 博士の退官記念論文集である．編集者は上記の二氏の他に V. Wirth, J. A. Elix, T. H. Nash III らが参画している．Herterl 博士は，固着地衣類のヘリトリゴケ科研究の第一人者として知られており，著作も多く，同博物館が発行する地衣類標本集である Lichenes Alpinum et Regionum Confinium や Lecideaceae Exsiccati の編者としても活躍してきた．

本書は19ヶ国79名の研究者が寄稿した44編の論文集でテーマも地衣類に関する分類，系統，生理・生態，地衣類相，二次代謝産物など様々である．扱われている分類群には固着地衣類から葉状地衣類，あるいは葉上地衣類に関する知見までバラエティーに富み，近年とみに細分化されている様々な属が登場する他，近年盛んになっている分子情報などに基づく研究も目につく．日本産の種としては地衣共生菌の新種 Cornutispora herteliana Knoph が記載され，葉上性のホルトノキゴケ科 Porinaceae に関する知見が R. Lücking により報告されている．

日本人研究者の名前がないのは寂しいが，論文の内容はもちろん，現在活発に活動している地衣類研究者が対象にしている分類群や研究方法，重視している分類形質などを知る上で参考になる． (柏谷博之)